

透谷私論

一八

白井伸昂

北村透谷の文学史上の評価については、一般的に次のような見解がとられている。

透谷は自由民権運動にインスパイアされて人間性の近代的解放の激しい欲求を持ち、それ故に封建的な旧倫理と習俗とに対して大胆な挑戦を行った。そして坪内逍遙・二葉亭四迷・森鷗外を経て来た日本近代文学史上に於て、近代的人間の理想のつきつめた内面把握を行い、そこから発した諸要求の意味と権威とを身を以て確認することのうちに文学の新しく深い存在理由を創り出して近代文学の主体確立を最初に実現した。しかし現実の近代的未成熟のために、この人間的理想と要求とを実生活の中に実現し得べきものとしてでなしに、「実生活」「実世界」に和解し難く対立する観念的な「想世界」に於て実現するべきものとする小市民的狹隘さを余儀なくした。(小田切秀雄「近代日本の作家たち」)

たしかにこの一般的评价は、透谷の文学史的评价と整理の意味では正しいものであろう。私も、この一般の見解を一応肯定しながら、今までとするとその用語のまゝで解決されたものとして放置されていた近代文学の主体と名づけられる彼の思想の内容を掘り起すこ

ことを論の第一の目標とした。つまり私のしようとする仕事は、透谷の詩・小説・評論、それ自体の意味や評価を明らかにするというのではなく、それらに述べられた本質的思考―文学精神・人間観―を出来るだけ系統だてて見ようとするものである。更につけ加えるならば、文学を「各時代に於ける新しい人間観の創造作業」と規定し、従つて透谷を日本で最初の近代的人間観の創造主として見ようということなのである。具体的には、一応「内部生命論」を頂点として、それへの到達過程と、それを頂上にした現実世界への下降を―「内部生命論」を頂としたピラミッド型に―人間観として整理しようと思う。これが本論である。この第一の仕事に加えて、それに基づいた文学史上の透谷の位置づけをどうすべきかを改めて第二の視点とし、結びに代えた。この視点の試みは、日本文学思潮が浪漫主義から自然主義に移行したなどという一般化した類型的機械的な整理方法へのわずかな批判としたかつたのである。

(一) 明治二十年代の社会と人間

明治維新政府の政治は、封建的な権力によつて近代化が推進され

るといふ矛盾をはらんでいた。また明治維新そのものも、不完全なブルジョア民主主義革命に終つたために、封建的道德と近代主義とが混乱したまゝ存在していた。こうした状態に輪をかけて、政府は条約改正を目標として、欧米文物の外面だけを模倣する極端な欧化主義政策をとり、更には日本帝国憲法を發布して天皇制絶対主義への道も取りつつあつた。だからこそ政府は、西欧デモクラシーの根本理念に基づいて実質的な近代化を推進しようとする自由民権運動を激しく弾圧したのである。

この社会的現実から、文学内容の方向としては、次の三点が問題となる筈であつた。

- (1) 残存するいくつかの封建的意識の残骸をぶちこわすこと。
- (2) 上からの近代化でなく、国民的な視点から近代的人間觀を打ち建てる事(下からの近代化)によつて既成倫理から人間をすみ／＼まで解放し、芸術の世界に「近代」という明確な時代区分を設定する事。

- (3) 更に天皇制とどう対決するかという事。

この三つの視点を、当時の小説家たち、わけでもこの問題を人間本質の問題として真正面から取り組んだ透谷を考へて行く上のス波特としたい。

(二) 透谷の問題意識

彼は当時の社会について次のように捉える。「維新の革命が政治の現象界に於て旧習を打破した」ことは「萬目の公認するところ」である。そして「武士と平民とを一団の国民となした」のも「実に此革命」である。△明治文学管見▽しかし「精神の自由を欲求す

る」のは「人性の大法」であり、「最後に到達すべきは各個人の自由にあるのみ」にもかゝらず「政治上の組織に於ては、今日未だ此目的の半ばを得た」ばかりである。その意味で明治初期の思想は、徳川時代につぐ「第二の混沌」である。この混沌の根本は「二個の潮流」の衝突で、その一つは「長上者の個人的自由のみを承認して国家公共の独立自由を知らず」「各個人の自由」を認めない「族長制的思想」の東洋思想であり、もう一つは「公共的自由を経験と學理によつて確認且つ握取」した「共和思想」の「西洋思想」なのである。――透谷自身は西洋思想に学ぶことのある事を暗示すると共に「民権という名をかりて起」つた「個人精神」もこの影響があり、その思想は政府の弾圧にあつて「一たび沈静し」「潜在」している現状であることを洞破する。そしてその基本的精神が失われている反面「物質的革命」ばかりが進み、人間の「精神が奪はれつつある。」この「物質的革命」は先の二者の衝突ではなく「外部の刺戟」によつて来たものだと言張する。ではいわけばこの精神的危機の状況において文学はどうなつていたのか――彼はそれを次のように言い切る。

現在の「多数の文豪は何を求めて汲々」としていいのか解らない。「何事も消極的に退縮し人生の靈現なる実存を證明し」ようともしない。「当代文学の潮流真に憂ふ可き」である。(「徳川時代の平民的思想」「当世文学の潮模様」「一種の攘夷思想」)

これらの社会觀察は極めて直感的であるにせよ、封建意識の残存、西欧文化の不自然な受入れ、それらの打破が、人間、文学の志向すべき問題であることを鋭く感じ取つている。この社会への姿勢

は文学が社会的広がりを持つ上で大切であり、後の私小説作家の意識には見られなくなつたものであることを注目したい。そして彼自らは「高遠なる虚想を以て真に広潤なる家屋、真に快美なる境地、真に雄大なる事業を視」、「空隙より」「人間に為すべき天職を捉り来」ること、「萬物の靈長として」誇るべき「莊嚴を」見出すことを自己の使命として絶叫する。（「人生に相渉るとは何の謂ぞ」「我牢獄」）

（三）透谷のとりくみ

この人間的課題に添つて彼の活動は始められた。

自我に目覚めた彼の思考の根底は、自由への激しい希求であつた。こゝに文学史上初めて自由という概念が、尊いものとして高らかに歌いあげられた。更に彼は、この自由を根本に人間の全てに美と肯定を発見しようとし、封建時代、社会的には反道徳的であつた恋愛は人間としての尊厳証しであるとして讃えられた。これは文学史上、近世への明らかな訣別でもあつた。

○彼等は山頂の鷲なりき

自由は喬木の上を舞ひ……△楚因詩▽

○自由は人間天賦の靈性の一なり △徳川時代の平民的思想▽

○恋愛は人生の秘鑰なり、恋愛ありて後人生あり。

△厭世詩家と女性▽

この自由と恋愛の讃美が、社会的にどれ程大きなものであつたかは実証するまでもない。

しかし、彼のこの封建的倫理の打破と近代の人間観形成への歩み

も、その要求が大きい程現実社会との障碍を鋭く感じ取つたに違いない。そしてその障碍との衝突と闘いなしには近代的文学性の誕生はない筈であつた。

我は牢獄に在る。余を囲むには堅固なる鉄壁あり、余を繋ぐには鋼鉄の連鎖あり。

という思考方法はそこに誕生した。

「蓬萊曲」「楚因の詩」等の詩は、この牢獄の如き現実をどうとらえ、どこに光を見つけ人間観としてどう組み立てて行くかという彼の苦悩の断片である。しかし透谷は、醜惡な現実との対決地点に於けるこの仕事で、少なからず挫折を経験していることを指摘しなければならぬ。即ち覚醒した眼を現実の矛盾に向け、その現実には崇高な人間的色彩を見出そうとする思考方法を失つて、その人間的尊嚴を自己内部の壁の中で神との共通点に見出そうとする方向に變つてしまふのである。それは彼の文学精神を現実的にしてゆく客観的要素をなくして、文学主体としては神秘的、閉鎖的、観念的に陥いる方向を宿すことにもなるのである。この原因は小田切秀雄氏のいう「透谷を再び現実的斗争に向つて元氣づけ……る人民的運動を見出すことが出来なかつたからだ」と結論するわけにはいかない。その為に透谷と自由民権運動との接触に触れてみたい。自由民権運動はいうまでもなく、日本の真の近代化運動として社会的には、いわば透谷を再び「現実に向かつて元氣づける」唯一の「人民的運動」であり透谷にとつて見れば現実には近代的人間性の光を発見する大切なモメントであつた筈である。彼がこの運動をどのように見つめ、人間性の光を発見しようとしたか、特に明治二十年の政変と透谷との関係

を見たい。この政変は言論の自由、地祖輕滅、外交挽回の三大要求をかかげて政府に迫つた大同団結の斗争、で保安条例の弾圧によつてつぶされたものだが、この時透谷の恋人（後の妻）石坂ミナの父昌孝は中江兆民等と共に東京を追放された。従つて透谷にも切実な問題であつた筈である。しかし

利は人情の至性なり、欲は社会の流動体なり。……世の壯士は口に利を難じ欲を咎むるも、其利の為に自ら責むるを悟らざるなり。……氏は、其生来の義心を以て誤つて壯士の群に推れたり……無謀の輩に誘はれたり。（石坂ミナ宛書）

と考えている。つまり透谷は、この変の本質が理解出来ていない。透谷が「無謀の輩」が「暴を以て暴を制せん」としたものとして否定したこの斗争は、客觀的には、売国条約案、言論弾圧に反対した自由民権運動史上劃期的な意義を持つ民主主義斗争であつた。従つてその放縱さの一面性だけを取り上げて否定されるものではなく、むしろその近代的民主的な面に自由を求める人間のなスポットを当てて良い筈であつた。このことから透谷は、小田切氏のいうようにに現実的の斗争が見出されなかつたのではなく、彼自身が前近代的な障礙にはつきり対決しつゝ、現実には自由を求める人間觀創造の方向を見失つてゐるのではないかという疑問を持つのである。従つて透谷自体の人間追求方法の誤りを探つて見ようと思う。

四 現実からの後退

彼は、現実と自らの人間觀の間にある矛盾を把握するのに「想世界と実世界の衝突」という二元論的対立方法を取つてゐる。（厭世詩家と女性）この二元的な対立はたしかに「悪戦苦闘し、弓折れ、

矢つくるの悲運を招く」ものであつたにせよ

内界の粉塵せる時にわれは寧ろ外界の諸識別を遠けて、暗黒と寂莫とを迎ふるの念あり、内界に鑿入する事深くして外界の地層を没却するは自然なり。△松島に於て芭蕉翁を読む▽

彼は「想世界に住む実世界の敗將」となりつゝあるのである。△厭世詩家と女性▽彼は二元論的に対立した両世界のうち、実世界を捨て、想世界を選択したのである。彼の説く自由な人間性は、本来想世界と実世界の強力な統一と調和にこそ、その実現がある筈であつたのに、この想世界選択は、二元論的方法の欠陥でもあり、創作視点の歪曲でもあつた。これによつて彼の思考は、自由民権運動に對しても、社会的展望の志向を失つたとも考えられる。恋愛觀も全肉体と全精神との解放に価値をおきそこに人間の無限の可能性を追求することよりもむしろ、人間の尊嚴を精神の靈的なものへ、神秘的なものへ求める方向をとつた。それは人間の自由が精神内に閉じてゐる結果を生んだ。

我は白狀す、我が彼女と相見し第一回の会合に於て、我靈魂は其半分を失ひて彼女の中に入り、彼女の靈魂の半分は断たれて我中に入り。（中略）この半截したる二靈魂が合して一にならざれば彼女も我も目成する靈魂を有するとは言ひ難かるべし。

△我牢獄▽

そして自然への讚美も、それに積極的に美を求め、自我と対決させとらえるよりも、その神秘的な一面に自我を滅却することが強調される。

絶大の景色は……「我」をも没了するものなり。絶大の景色に對

する時に詞句全く尽くるは、即ち「我」の全部既に没了し去れ、恍惚としてわが此にあるか、彼にあるかを知らずなり行くなり。△松島に於て芭蕉翁を読む▽

五 実世界から想世界へ

二元論的追求による想世界の選択が思想の社会的広がりもなくしたことは、当時の人間の課題を本質的に解決することから一步退いたという指摘は一応肯定出来よう。しかし内部追求が神秘的、観念的になつたとしても、それは芸術を創造する母胎として存在出来る筈である。従つて、その神秘的なものがどう表現されるかも視点の一つとしたい。実世界を捨てた透谷の近代自我の戦いは、社会から孤立した人間の内部に中心が置かれ、その中で人間の尊厳を見出す追求となる。彼の思考方法の特徴である二元論によつて人間の想世界は更に「神性」と「人性」の対立としてとらえられた。

思へば、わが内には必ず和らがぬ爾二つの性あるらし。ひとつは神性、ひとつは人性この二つはわが内に小休みなき戦ひをなして、わが死ぬ生命の尽くる時まででは、われを痛ませ、疲らせ、悩ますらむ。△蓬萊曲▽

近代的自我に目覚め、浪漫的欲求を持つ透谷が、自己内部の二元的対立の中で浪漫主義的人間観を推し通す努力がなされたとすれば、浪漫主義が人間の偉大さへの絶対的信頼である以上、自己の中に神を見出すことであり、「人性」と「神性」とを「人」の中で統一する事であり、彼の思想に「神」を行き渡らせることである。だからこそ、彼の心の中の人性と神性の対立は「互ひに主権を争ひつつ、屈竟の武器を装ひて、いつはてる」とも知れぬ闘いであつたに違い

ない。

彼はこの苦しみが人間にとつて意義あることを確信しつつ、その果てに到達した場所は、人間の中の「神性」であつた。

六 「内部生命」の肯定

「この両性の……闘ふこと愈々多くして、愈々激奮し」「疲殆して昏睡するが如き間に」「愚」は「善に転じ」「心機妙変」によつて、人間には「心宮内の秘宮」が発言出来ると彼は主張している。

（「心機妙変を論ず」「各人心宮内の秘宮」）この「秘宮」とは、人間が人間としての崇高さに於て神と相通じる場所であり、「人生の最大至宝」である「永遠の生命の存するところ」と確信したのであつた。現実が醜く愚かな故として、全人間的解放の可能性を見出しえないまま、そこから目を遠ざけた彼ではあつたが、人間の窮極にやはり、人間的權威への信頼と確認を得たのが「秘宮」の肯定であつた。この中に全ゆる自由も恋愛も住むことが出来た。更に彼は、この「秘宮」を基礎にして想世界の完成を急ぐ。人間に永遠の生命を肯定したことは、人生を現在のみでなく未来に至るものとして見、その過去から現在、未来へと動く人間は「宇宙の所有物」であり、「人間個々の希望は宇宙の精神」と合体することだと考える。△頑執安排の弊▽即ち彼の見出した彼内部の神（秘宮）は、この宇宙の精神と合体し、神秘的に統一されるし、又造化自然も宇宙精神の一表現にすぎないが故に

富獄よ汝こそ不朽、不死に邁きものか、……「自由」汝と共にあり△富獄の詩神を思ふ▽

と讀え、人間と世界の調和、自由の精神がその神秘の中で完成さ

れ、神秘の中で歌われる。

人間の最奥なる所、之を人間の空と言ひ、造化の最奥なるところを造化の霊と言ふ。そこに大平等の理あるなり。八萬物の声と詩人V

自己の秘宮の至大至宝なるものが、人間の中にある神であり、その秘宮はそれ故に、宇宙の精神と通じて未来に存続し、人間を囲む自然内の詩神も又それと調和すると浪漫詩人は断定する。その秘宮に秘む至大至宝の世界、それこそ「内部生命」と名づけられたものである。内部生命論Vこの「内部生命」の肯定によつて、人間、宇宙、時間、空間を見る時、全てこれらは統一される。神的なものと人的なものとは、人間の中でも、時間、空間の中でも融合され、神が行き渡ることになる。即ち彼の選んだ想世界そのものは「内部生命」の肯定によつて完成されたのである。「再造された内部生命の眼を以て観る時」徳川時代の虚無思想も視友社の文学も、「不生命思想」として批判出来たし、哲学、文学、倫理も内部生命を極めるかどうかでその価値判断をする事が出来た。この透谷の、全ての内に内部生命が存在するという主張は、結局人間が窮極的に善であり、神や宇宙に通じる永遠の価値を持つものであるという人間肯定なのである。たしかにそう考えれば近代的人間の精神は、内部生命に存在するものであり、恋愛にしても内部生命の赤裸々な暴露といえよう。その意味では、この主張が近代人を支える精神的支柱であり、近代芸術の創作地点の詩的表現であつたろう。しかし前に述べたように、実世界、想世界の区別から想世界を選択するという方法論的誤りは、その近代的内容を彼個人の想世界内でしか広げ

られず、現実性の薄い追求となつた。そして更に、人間の心を人性と神性の対立によりなると考え、人間に秘宮、内部生命が存在するという思想は、常に現実人間のありべき姿を背景に持たない存在論であることに注目しなければならない。即ち、人性、神性の対立、秘宮、内部生命の内容を具体的事実の中に見出し作品として表現せず、それらが觀念の世界で対立し、次の存在に変わるなどという概念の断定だけで論理を進めようとする方法を取っている。この方法は形而上の世界に觀念の存在を肯定してゆく論法であり、その為に主観的で、苦惱が客観化されないまゝ、彼の觀念の世界にナマのまゝ閉じこめられるという欠陥を持っていた。この人間追求方法は、思考内容が具体を通して形象化される小説の創作視点としても不十分であり、その為に彼の小説が彼の思考の深さに比べてはるかに感動が浅く不明解に終つていくと考えられる。というのも彼自らが想世界を選択するという出発の為に、人間の尊嚴の追求を「如何に人間が生きるべきか」という本質的課題と関連させ、苦惱を有機的に方向づけ出来ずにそれを対象化し、類型化してゆく方向をとつたことに原因しよう。この欠点を持ちながらも、やはり彼の思考は、そのまゝ、苦惱する詩人のそれとして近代浪漫主義精神の思索家のそれとして輝やいていることは勿論忘れられてはならない。

七 想世界から実世界へー現実への下降

彼は「内部生命」を肯定することによつて、彼の想世界では融和点を見出した。だがこれで作業は終つたのではない。この想世界の結論が実世界ではどんな意味を持つたかという政治思想的側面を考へて見たいと思う。何故なら「人生は社会周辺の事実で囲まれて」

「性行を経倫すべき倫理」が常に必要だからである。いわば彼の「実行的道徳」の考察である。△実行的道徳▽

「内部生命」は「情熱」、「熱意」によつて外界にアプローチする。△熱意▽

透谷研究家の一般的見解は、彼が共和思想の持主であることを主張するが、今まで考へて来たように、少々疑問である。

- 1、自由民権運動を正しく理解出来ていない。
- 2、欽定憲法、教育勅語等にも全く発言していない。
- 3、当時共和思想の先進的立場をとつた中江兆民にも批判的である。

吾：居士の高風を遠慕せしことあるものなり、而して今や居士在らず徒らに半仙半商の中江篤介法儒にして世を避けたる、驕慢にして世を擲げたる中江篤介あるを聞くのみ
△兆民居士今いづくにかある▽

以上のように考えると、その疑問が一層はつきりすると共に、次のいくつかの発言は彼が共和思想に触れながら、結局はそれを放棄し、いくつかの思想を二元的対立としてとらえ、そのどちらにもつかず、想世界で折衷的に解決しようとしていたことを示している。

○荒誕なる仏国生れの自由主義我に於て甚だ有難からず、絶望より転化し来れる独露あたりの虚無思想我に於て得るところありと言ふべからず△一種の攘夷思想▽

○東洋の思想に執着するも愚なり……西洋思想に心酔するも愚なり△國民と思想▽

○數術は……進歩すると、人世に於て何の功益するところあ

らんや、唯心論も亦た然り……唯物論も亦た然り△頑執妄排の弊▽

これも想世界選択による現実への解決策を見出そうとする努力を少くした彼の思想的反映ともいえよう。こうして彼の思想的立場はいまになるが、彼の内部生命の肯定が人間信頼を肯定しようとする努力だとすれば、人間全て内部生命を持つが故に「人性に上下なし、人情に古今なし」△内部生命論▽というキリスト教的ヒューマニズムに近い思想だつたのではないだろうか。これは社会思想としては、現実性は稀薄であり、

○戦争は政治家の罪にあらずして、人類の心の量れるに因つてなる……。△「平和」発刊の辞▽

○高潔、崇高なる詩人哲学者、悉く戦争の邪念を惡む。△想断々▽というキリスト教の匂いの濃いヒューマニズムでしか、拡大する日清戦争の危機にも対処出来なかつた。しかしこの現実的には弱い思想も封建的要素の強い現実の中で近代的な人間信頼をしつように求め追求した彼としては、彼自らがいうように、現実から一步退いた「高踏思想」△國民と思想▽にならざるを得なかつたであらう。

結びに代えて——透谷のアウトサイダー性

人間を封建的規範から解放しようとする浪漫主義は、本来社会的な広がりを持つにもかかわらず、それを持たなかつたことは、それだけに透谷の封建的規範との対立が深刻であつたということであろう。このことから透谷を完全に明治社会の規範の外に在る反社会的な人物・アウトサイダーとして設定を試み、それによつて社会的でなければ無意味ですらある近代精神の屈曲を整理出来れば、先までの

不完全な私論を少しでも補うことにもなろう。

アウトサイダーそれは現在の世界文学の上で、サルトル、カミュ、ヘミングウェイ、ドストエフスキー等に名づけられている概念である。彼等の思想は、現代の合理主義に反抗し、キリスト教滅亡以後の西洋文明の没落を防ごうとする為に、自からをアウトサイダー（現代社会倫理からのけもの）と設定し、芸術を通して新しい人間観を創造しようとする人間回復の爲の重要な創作態度である。しかし、透谷に名づけたアウトサイダーは、封建制の非合理的世界への反抗であり、封建的倫理のぬぐい去れない明治社会からのけものという意味である。この精神史上、立脚地点の違う両者を、同じのけもの意識の面から類似点を探り新しい透谷の意味を発見したいと思う。U・ウィルソンの著「アウトサイダー」によれば、そうよばれる一連の作家の特徴は次のように整理される。

1、彼等には、彼等個人がもつより大きな、より強力な秩序に照し合せて現実の秩序が虚偽に見える。

2、その為に自ら内側を拒否し、社会の外側にしようとする。――

常識的道徳への批判

3、その為に自分の目的を持たぬ自分を失った人間になる。

4、だから次には自分の所在、存在を自らの意識でたしかめようとする傾向が生れる――唯我主義（精神の深い渴望を癒やす活動）

5、永い苦悩の果てに自己の内面と外部の世界とを等価値のものとして眺める境地に達する。（純粹意志の発動による自己実現、自己の存在観人生観の最も純粹なビジョンの確立）

透谷が

この世の悲しい哉、抑も今は何者ぞ

……空虚とのみぞ見ゆるなる（蓬萊曲）

という時、又「厭世詩家」と自らを見た時彼の出発にはアウトサイダーの思考がある。彼の持つていた偉大な近代的秩序からは、世は「空虚」であつたらうし「世に従ひ難」かつたのも当然であつた。

その時に「世に充つる魔霊の軍兵になり終」らない為には、現実（社会の内側）を捨て去ることであり、自らを社会の外におくことであつた。彼が実世界を捨て、想世界を選択した時から彼はアウトサイダーとなつた。彼は自己に沈潜し、没入し、自分を更に高い次元に意識しようとする。その苦痛は、人的と神的との対立として考えられた。その人的なもののこそ、現存の秩序に従おうとする傾向であり、その中で彼が純粹である為には、自分のインサイダー的部分（人的）を捨て去つてより高い次元に近づかねばならなかつた。その高い認識こそ、神であつた。

より高い認識への苦痛は、彼を非常に疲れさせたが、その後透谷もまた純粹意志の発動を見る事が出来た。それこそ心機妙変の時であり秘宮内の内部生命の肯定の時だつた。人間のヴィジョンそのものである内部生命が自然にも神にも調和するものだとなつた。彼は考えたことは、多くの本質的アウトサイダーの調和感、離脱の境地と相通するものを持つていた。

以上、透谷がアウトサイダーであつたと肯定するとすれば、日本の近代文学はアウトサイダーから出発したと考えられるし、又浪漫主義の人間観は、人間の本質的善への絶対的信頼である故に、それ自体インサイダーの人間観であるべきであり、それがアウトサイ

ダーの唯我主義に開花したことは、日本の近代社会と文学精神の特徴を示しているといえよう。更に後の自然主義の私小説的傾向への源泉が已に透谷にあるという説は一応うなづけようが、それは透谷以後の作家たちが、透谷のアウトサイダー性（それ自体は社会への批判がある）を理解出来ず、その部分を取り除いた唯我主義的部分のみを引継いだ結果によるものであらう。

現代文学の新方向の基点が、アウトサイダーにあるとして改めて文学史を見る時、日本のアウトサイダーたち、とりわけ、その近代の出発としての透谷を、その面で考察する必要がある。